
禁池

エルフェイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁池

【Nコード】

N3599G

【作者名】

エルフェイム

【あらすじ】

サークルの部誌に掲載した作品を、修正したものです。神は姫に恋をした。しかしその愛はすれ違いを生み、お互いの身を破滅へと追いやる。転生しても巡り会おうと約束をした二人であったが……？

プロローグ

深の国にはとある伝承が残っている。
それは、こういったものだ。

かの城の禁池には神が宿っている。むかし、姫がその神に恋をした。
神はその想いを受け取った。

しかし姫は一国の姫であって、神だけの姫ではなかった。そのため
に姫は、神と結ばれる事は叶わない。

姫と神は悩んだ。そして姫は人間のままでいる事を望み、神は姫と
結ばれる事を望んだ。

意見の相違によって小さな溝が生まれたが、姫は気にしなかった。
逆に神は姫の心が離れてしまうのでは、と不安になっていた。そこ
で神は思い切った行動に出る事にした。

神は、姫を遠くへと連れ去り隠してしまった。そうすれば、姫が他
に目を移す事もなく自分の所にくれると思っただのだ。

しかし神の思案通りにはいかず、姫は毎日泣いて過ごした。

「何故、妾にこのような処遇を課すのですか」

神は言われた意味が分からなかった。ただ、神は姫とともにいたか
っただけなのだ。

仕方なく、神は姫を城に戻す事にした。姫は喜んだ。

あくる日の朝、姫が神のもとへと赴いた。

「妾……他国の皇子と、祝儀を迎える事になりました」

姫の表情は暗く、悩んでいるようだった。神は

「わたしで良ければ……愛しいそなたの力となりましょう」
と言った。姫は後ろめたそうに言った。

「妾を、再びどこか遠くへ連れ去っていただけませぬか？」

以前、あなた様の好意を断った身でありながら、烏澁おしがましいとは思いません。

しかし妾はあなた様以外の方と結ばれるのはやはり厭なのです」

この姫の言葉に神は喜んだ。

そして神は姫を再び遠くへと連れ去った

本当の所、姫は自殺してしまったのだ。神は悲しみ、人間への転生を望んだ。人間であれば、このような事にならずに済んだのではないかと思つたのだ。

しかし当の姫は、この様子を見ていたある神によって神化されていた。神は人間へ、人間であつた姫は神へ

皇族は何世代か替わり、姫と神は何度か相見える。

これは、語られる事のなかつた本当の物語。

蓮葉

神は待っていた。愛しい、愛しい姫が来るのを。出会いは突然だった。たまたま神が禁池の池から顕現した時、出逢った。

姫は皇家一族以外の者がいるはずもない禁池に現れた存在に、ひどく驚いた。姫の名は蓮華れんぽわといい、神は自らを蓮葉れんしょうと名乗った。姫と神は何度も会う内に次第に惹かれあうようになった。この関係に皇家は気が付かなかった。姫は普段から気晴らしに禁池を散歩するのが好きだったからだ。蓮葉は、作られた神だった。彼を作ったのは、燕泓えんおうという神だ。燕泓は特殊な神だった。様々な者を創り出す能力に長けていた。その気まぐれで生まれたのが蓮葉だ。蓮葉は他の神々とは異なっていた。普通の神々には持ち得ない、極めて柔軟な精神を持っていた。

「蓮華、毎日のようにこちらへ来るとは中々に姫というものは暇なのだな」

ある時の蓮葉はそんなからかいの言葉を用い、ある時は

「そなたは……何故そのように純粋な存在で居られるのか？」

余には分からぬ」

と優しくそうに言った。彼は気まぐれで、気むずかしい性格でもあった。時に誘拐紛いの事をした時もあった。そんな神に姫は振り回されながらも愛おしいと感じていた。互いに、本当に愛し合っていたのだ。

ある日蓮葉のもとへ蓮華が来たとき、姫は鬱ぎ込んでいた。神が姫へどうしたのかと聞くと、姫は一言言った。

「妾は、他国の殿方と祝言を挙げねばならぬようだ……」

神には意味が分からなかった。否、理解しようと思っていなかった。いつまでも共に居てくれると思っていた神は、よもやそんな言葉を言われるとは思っていなかったのだ。神は再び姫を攫ってしまおうかと思案していたが、やめた。それは姫を侮辱する事と同様で

あるように感じたからだ。

「蓮華、そなたはどうするのだ？」

余は……そなたが決めた事に従おう」

姫は、一瞬悲しそうな顔を見せた。神は言葉の選びを間違えたのだろうか、と考えた。だが、すぐに姫がいつも通りの表情に戻ってしまったために考えるのをやめた。

「蓮葉、妾たちは……結ばれなくとも、永遠に共に」

よく蓮華が口に出すようになった言葉だ。蓮葉は、姫が他国の皇子と結ばれる覚悟を決めたのだと思った。だがそれは間違っていた。姫はある決意を秘めていたが、そういう決意ではなかったのだった。

「蓮葉は……妾の事を永遠に想ってくれるのかえ？」

ある時そう姫に聞かれた神は、こう答えた。

「余は、永遠に想っているさ。」

例え……そなたの命尽きようとも、余は想い続ける

何度、死が我らを別つとも……必ず巡り会い、愛し合う。

余はそれを信じて疑わぬ」

蓮華は安心したように、久々に落ち着いた笑みを浮かべた。しかしそれは蓮葉の見る、蓮華の最後の笑みであった。

一人の美姫が禁池にある、神の住まう池に入ってしまった。入るのには着物が重かったのか、襦袢のみを身に纏っていた。一步一步着実に歩みを進めていく。その様子はとても落ち着いていた。

「蓮葉……妾は、あなた様を永遠にお慕い致します。」

この命、潰えようとも」

池の中心に近づくとつれて、姫の体は沈んでゆく。そして肩が飲み込まれ、とうとう姿が見えなくなった。

蓮葉がこの異変に気が付いたのは、それから数刻ほど経った時だった。池が歓喜に満ちている。神はそう思った。それと同時に禁池中が荒れていた。彼らから聞こえてくる情報はすべて断片的で理解が困難だった。それらからの情報を組み合わせ、導かれた答えは一つだった。

それは悲しい事実。愛しい姫が死んだ、それだけだった。

「この池の……贄にえとなつたのか」

神は悲しそうに呟いた。

「余が、余が人であつたならば……そなたは自らの命を絶つなどという事をせずに済んだのであろうか」

神は嘆いた。今までにこれほど辛い事はあつただろうか。おそらくなかつた。神にとって、これ以上に衝撃的な事はないように思われた。

「余は、神を捨てるぞ。もはや神でいる理由はない」

そう一言、神は言い捨てる。輪廻の渦に身を投じた。

蓮華

蓮華^{れんぽあ}は驚いていた。これほど驚いた事は、神と出逢った時以来かもしれない。ここは知らない場所だった。そして知らない神が目前に存在していた。

「蓮華か」

神は口を開いた。蓮華は驚きのあまり頷く事しかできなかった。

「あたしの名は、燕泓^{えんおう}。

蓮葉^{れんしやう}の生みの親だ」

「……燕泓様」

蓮華のかしこまった口調に、燕泓は手をひらひらと振って答えた。苦笑しているようである。

「蓮華よ、畏まらなくとも良い。

それよりも悲しい知らせがある」

蓮華は首をかしげた。なかなか可愛らしい様子である。燕泓はそれを見てどことなく悲しみを覚えた。

「当の蓮葉なのだが……あやつは、人間へと転生した。

お前がこのまま輪廻の渦に入るというのであれば、おそらくそう簡単に巡り会う事はないだろう」

衝撃的な言葉であった。蓮華は確かに入水自殺を図り、それは叶えられた。そして来世で蓮葉と結ばれようと思ったのだ。だがそれは叶う事はないだろう。何故ならもはや何の力もない二人には、互いを引き寄せる事ができないのだ。もはやもう一度、巡り会う事は絶望的であるといえた。

「そんな顔は、なさんな。

いい事を提案してあげようと思ったんだ。

お前、神になる気はないか？」

燕泓の誘いを受けてから何十年も経った。蓮方という名はそのま
まに、彼女は神になった。何十年も神が転生した人間を待ち続けた。
そして遂に、知ったのだ。

蓮葉の転生した人間が生まれる事を。

そして彼が十七になった時、二人は再び出逢った。

「あなた様に逢えて嬉しいわ。蓮葉　いえ、紅緋^{ほんひ}」

「そなたは……誰だ？」

蓮華は覚悟していたが、やはり少し辛かった。彼がこちらを覚えていないのは仕方がない事だ。輪廻の渦に入ってしまったえば、転生後にそれ以前の記憶を持ち続ける事は許されない事なのだから。

「妾は、蓮華」

「れん……ほ、あ」

何かを思い出しかけたのだろうか。そう蓮華は訝しむが、そういうわけではなかったようだ。紅緋は全く思い出せないと謝ってきた。相変わらず悲しい事に変わりはなかったが、それでも再び相見える事ができただけでも幸せだと思っていた。

しかしその幸せは長くは続かなかった。

まだ十七であるが、紅緋は名の知れた武将だったのだ。紅緋は度々戦へと出かけてゆき、良い結果をもたらして帰ってくる。武将として戦に勝ち続ける彼を、蓮華は誇りに思うと同時に心配をしていた。いつ命が尽きるか分からないのが戦なのだ。自分の与り知らぬ場所で他者に殺されるなど、到底耐えられそうになかった。

その心配はおおよそ現実のものとなり、とうとう紅緋は負傷して帰ってきたのだ。その傷は深く、そして酷かった。誰しもその傷を見ればもう長くはないと思っただろう。

「紅緋……」

本当は動けないはずの紅緋が禁池へと姿を現した。蓮華はその痛々しい姿に涙を見せた。

「蓮華殿に、伝え……たい事が」

力なくほほえむ姿は以前彼が神だった時に見せた物と同じだった。紅緋はゆつくりと言葉を紡いでゆく。

「余は、このような……死を迎える、事に後悔はしていない。

だが……そなたを、残してゆくのは正直、辛いと……感じるのだ。例え、死が我らを別つとも、そなたとまた……こうした時間を、味わいたい」

立場が逆だった頃、同じような事を言われた。それを思い出した蓮華はますます泣き止む事を忘れてしまった。

「蓮華、短い間ではあったが余は……そなたを慕っている。

ほら……泣くでない。その姿も美しいが、やはり笑っている方が余は好きだ」

「紅緋」

紅緋は蓮華の涙を自由に動くほうの手で優しく拭った。そして神に向けて、皇子は言った。

「余が死んだら……」

そなたの住む池へ、沈めてはくれまいか？」

かつての自分が考えた事と同じ事を考えたらしい。彼の頼みに、神は静かに首を縦に振った。それを見た紅緋は微笑んだ。

「死しても、余はそなたと共に在ることを誓おう」

「妾も、以前より……そしてこれからもあなた様と共に」

神は涙を溜めて、微笑もうとした。うまくは笑えなかったかもしれないが、皇子は満足そうな顔をした。それきり、彼が何かを言うことはなかった。灯火が、潰えたのだ。

「妾は……神という存在が何と苦しいものかを今知った。

蓮葉は、この苦しみに耐えられなかったのだな……」

妾も耐えられぬかもしれぬ」

皇子が息絶えてから神は約束を果たし、その後神としての力を失った。それは彼女の意思ではなかったが、悲しみに明け暮れた神には良い事だったかもしれない。

能力の喪失によって、今更ながらに蓮華へ老いと死が訪れる事と

な
っ
た。

紅緋

神は不安だった。力を失い人間となったあの神が、自分の事を忘れたせいでこの場所へ訪れないのではないか。またはこの場所へ来れない人間へと転生し続けてしまうのではないかと。

神の名は紅緋ほんひという。この神が待つ人間の元は蓮華れんぽあという神だった。紅緋は燕泓えんおうという神によって神となった。

紅緋という人間は確かに死んだ。しかしその魂まで消滅したかというのと、それは違う。元々神として存在していた彼の魂は永遠に廻ることを許されている。逆を言えば、魂の消滅は許されていない。

紅緋はこの禁池から出ることは叶わない。紅緋は燕泓との契約の為、この禁池に縛られている。だから蓮華が皇族以外に転生した場合、紅緋と逢うことはほとんど不可能だ。

不安な日々が続く、百何年が流れた。神はいい加減にしてくれと、悲しくなった。そんな時に姫は現れた。

「はて……あなた様は、何ゆえにこの場所へおりまするのか？」

以前逢った時と同じ姿で、蓮華は現れたのだ。

「蓮華……」

思わず紅緋は呟いたが、姫には聞こえなかったようだ。

「来て、くれたのか？」

こちらの呟きは聞こえたようで、姫は背筋を伸ばしたまま神に答えた。

「ここに、来なければならぬと感じたのです。

妾の名は……香楓こいもみ」

しっかりとした瞳の輝きであった。以前の蓮華は儂い印象があった。しかしこの姫の印象は、強く安定した印象であった。

香楓はこの神に引っかけかりを覚えた。何か、ある。

「余の名は、紅緋だ。

そなたをずっと待っていた」

その言葉を聞いたとき、香楓はやっとこの感じの正体を理解した。おそらく香楓と紅緋は前世の時から仲だったのだ。紅緋の反応がそうだった。それに、この庭には古くから言い伝えが多く存在している。それに関わりがあるのだろう。

「申し訳ありませぬ、紅緋様。」

香楓は、あなた様の事を覚えていないのです」

神は残念そうな顔をしたが、香楓は仕方がないことだと思った。人間は、転生する際に記憶を全て消されてしまうと聞いている。そうしなければ、人間が一人以上の人生に耐え続けることが難しいからだといわれている。故に、ごくたまに前世の記憶を持って生まれてくると、その人間は常に不安定であるそうだ。

しかし香楓は不安定とはいえない部類の人間である。きっと前世の記憶を思い出すことはないだろう。

「紅緋様、妾たちの話を聞かせてはくれませぬか？」

香楓は蓮華とは異なり、積極的な人物のようであった。

香楓は賢く、強く生きてきた女性だった。紅緋は蓮華とは異なる部分に首をかしげながらも、嬉しく思っていた。紅緋が皇子だった時、こんなに逢える日々はなかったからだ。忙しく、毎日を駆け抜けているような日々だった。愛しいと感じるようになってからあの神と逢いたいと何度思ったことか。愛しい神のいる禁池から遠く離れた土地で、何度想いを馳せた事か。

毎日のように愛しい存在と逢えるのが、これ程までの喜びになるとは知らなかった。紅緋は幸せだった。おそらく香楓も幸せだろう。しかしやはり、幸福は唐突に終わりを告げる。

「紅緋様、妾……他国の皇子と祝言を行うことになりました。」

妾は永遠にあなた様の事をお慕いいたします。

しかし妾は一国の姫。運命と向き合おうと決意致しました」

香楓の表情は寂しそうであったが、自らの運命を肯定していた。

「妾は、あなた様に愛された事。忘れることはありません。」

寿命を全うした時、ようやく妾はあなた様と結ばれることができる……」

香楓は強い女であった。紅緋にはとても真似はできなそうだった。香楓は初めて紅緋の近くへ自ら進み出た。そして全てを包み込むかのような微笑で

神に口付けた。

その後、香楓は他国へ嫁いでゆき、二人が逢う事はなかった。香楓は賢妃として寿命を全うした。香楓は本当に賢い女性だった。ただ一つだけ間違いを犯した。紅緋へ一言、もしくは相談する事をしなかった。それが再度のすれ違いを生む事になってしまう。

紅緋は、蓮葉れんしょうの時同様、人間であれば良かったのと思っていた。そうすれば彼女と離れ離れになる事も、この禁池に縛られる事もなかったのだから。

香楓は紅緋に秘密である契約を燕泓に持ちかけていた。その契約とは香楓が無事に寿命を全うできた時、彼女を神族にするといったものであった。

香楓は無事に神族となった。しかし彼女の目的であった「紅緋と結ばれる」というものは叶わなかった。

紅緋は、輪廻の渦へと入ってしまった。勝手に一人で行ってしまったのだ。香楓は深い憤りを覚えた。待っていてくれると言っていたのに、彼は勝手に先へ行ってしまった。

だからといって自分まで輪廻の渦に入るの利口ではない。

香楓は悩んだ末このまま神でいる事にした。考える時間はいくらでもある。彼と再び出逢えるまで、どうすれば結ばれる事ができるかを考えていよう。

香楓

香楓こうふうは何かに気がつき始めていた。それは人間であった頃に聞いた紅緋ほんひの神になった経緯や、燕泓えんおうの態度などから推測した結果であった。紅緋はこう言っていた。

「禁池にはかつて美しい神がいた。

その神とこの国の皇子であった余は、想い合っていた。

余は、戦の傷が元で命を落とし、神はその悲しみのあまりに力を失い、流転の渦へと身を落とした。

命を失った余は燕泓によって神にされ、禁池に縛られる事となった。

余は、愛しい神が転生する姫を待ち続けた」

そして自らの経験はどうだろうか。自らも、紅緋と同じような道を辿ってはまいだらうか。もしかすると、何回も同じ事を繰り返しているのかもしれない。

だが、これは推測の域を出なかった。実際に起きている事に当てはめられるのか、確かめる手段は紅緋の人間となった存在に会えない。紅緋の転生した人間にこの為だけに会いたいと思っただけではない。彼と離れてから逢いたくないと思っただけでもない。ずっと、待ち続けている。

香楓は、疑問の解決策としてではなく純粹に、ずっと待ち続けていた。愛しいあの神に逢いたい、ただそれだけだった。

「何者だ？何故この禁池にいる」

厳しい声が聞こえてきた。香楓は、ああやっと来た。と思った。ゆっくりと振り向いて彼の存在を確かめる。親愛の込められた視線を向ける。

「妾は、この禁池が神。香楓

名は何とこののです？皇子」

皇子の名は倅^{こっしん}綸と言う。禁池へは突然無性に行きたくなつたのだと言っていた。香楓は既視感を覚えた。自分もかつて同じような事をしなかつただろうか。考え込む神に、皇子は戸惑っていた。

「妾は香楓という。」

「この名に覚えは？倅^{こっしん}綸」

神の言葉に尚更皇子は混乱しかけたが、自分の感情を見せるのは愚かな事かと思ひ隠した。見事な隠し方だった。

「いや……知っているような気はする。」

「だが、全く思い出せない」

その言葉だけで十分だった。香楓は自分の立てた仮説が正しかったのだと理解した。神は皇子に近づいた。

「倅^{こっしん}綸……妾と約束をしましょう」

「約束？」

神は右手を皇子の頬へと伸ばし、壊れ物を扱つかのようにそっと触れた。

「お互い、秘密はなし。」

特に互いの未来に関わる事に関しての秘密を一切禁止します」

あと、言わないってのもなしよ。と神は念を押した。倅^{こっしん}綸はよく分からなかつたが、神に対して秘密を作ったりするのは気が引けた。「分かつた。約束をしよう」

この時以降倅^{こっしん}綸は度々この禁池へと訪れてはたわいもない会話をしていた。香楓は皇子が来る度に優しく出迎えた。そうする内に倅^{こっしん}綸は香楓へ惹かれていった。皇子は性格こそ丸くなっていたが、紅緋そのものだった。あの剛毛そうな髪の毛や、少し太めの眉まですべて神だった頃と変わらなかつた。香楓はこの皇子が以前の神と異なる人物であるように思えない。

根本は同じだが、周りは変質する。それでも愛し抜いてくれた紅緋の愛の深い事。それを香楓は思い知らされた。香楓は倅^{こっしん}綸を紅緋としてではなく、一人の皇子として扱った。次第に紅緋と無意識に

比べる事がなくなっていく、倅綸そのものを愛するようになっていった。

「香楓、相談がある」

突然倅綸がそう言った。香楓には相談されるという事が初めてであるかのように感じた。それもそうだ。今までこの二人は転生してきたが相談をする事だけはなかった。香楓は喜びを感じながら、話の続きを促した。

「余に、目付役らが他国からの姫を娶れと。」

余にはそなたがいれば十分なのだ。どうすれば良い？」

神はその言葉に、自分のとった結論を言おうとした。神は畏まった言葉を使うのをやめていた。倅綸にやめてくれと言われたのだ。敬語をやめたが、逆に言葉遣いは男のようになってしまった。だが、敬語を使わない人物で女性はほとんど居なかったのだから仕方がない事だといえよう。

「妾は、昔人間だった。この国の姫だったのだ。」

姫だった妾は、他国の皇子と祝言を迎えた。

そのときの妾には……とても大切な方がいた」

皇子は何も言わずに聞いている。珍しく表情に、感情が浮かんでいる。

「大切な方がいたが、妾は一国の姫である。」

故に、その役目を優先させた。

その役目を終えたら、彼の元へと馳せ参じようと思っただけ」

懐かしそうに目を細めて語る姿は、皇子は少し胸が痛んだが何も言わなかった。

「しかし、それは叶わなかった。」

余が寿命を全うし、かの神へ会いに行った所……余の愛する神は、我らが転生する為に入るべき流転の渦に落ちた後だったのだ」

皇子は厭な予感がした。だが、この昔語りを止める事はできない。「流転の渦に落ちた愛しい神の代わりに、妾が神となった。」

そして、ずっとずっとその神の転生を待ち続けた。

そして、出逢う事ができた。それが倅綸だ」

倅綸が息を呑んだ。香楓はゆっくりとした動作で彼を見つめる。その瞳に嘘はなかった。

皇子は「ゆっくり考えてくる」と言っつて禁池を去って行った。香楓は小さく溜め息を吐いて池に姿を消した。

「香楓、余は決めた。

正妻はとらない。だが、何人かを後宮に迎える」

倅綸は神の池へ来るなり言い放った。すると、神が池から出てき「そう」と一言だけ言った。

思ったよりも平然な様子の神に皇子は訝しんだが、他にも聞きたい事があった。

「燕泓とは、どういった神だ？」

余は、会えるのならば会ってみたい」

神は首をかしげながら答えた。

「会って、どうするのだ？」

あまり乗り気でないような返答に、倅綸は一瞬怯むもその表情を見て落ち着いた。香楓は、倅綸の行動が純粹に分からないから聞き返していた。

「余は、我らが何かを繰り返しているような気がするのだ。

全てではないが、既視感を覚える事がある。

その正体を知りたい。そして

このままでは我らは決して結ばれる事のない運命だ。

……どうすればこの運命を変えられるのか、その知恵を借りたいのだ」

倅綸も香楓と同様に何かを感じ取っていたようだ。神は、自らの考えを確認する良い機会かもしれないと思った。燕泓に話したところ快く受けてくれた。

かの神は実の所、いい加減にこの二人の関係が厭になつていた。親しんでくれていた自分の創り上げた神が憐れでならない。そして人間でありながら、神に対して敬う前に愛を知った姫が哀しくてならない。この二人は何度繰り返すつもりなのだろうか。そろそろ、このすれ違いを終わらせても良い頃合いであるう。そう思つていた。燕泓は二人が解決すれば良いと思つていた。そしてこれからもう思つたろう。だが、過去に二回ほど彼らを巡り合わせてみたが、うまくはいかなかった。人間の方が死ぬと、神は自分を保てなかったのだ。転生を待つている間の片割れをずっと見ていた。双方共に、相手を強く愛していた。それが枷になつているのか、うまくいかぬ。燕泓は、これ以上平常で見守り続ける事ができる程、無感情な神ではなかった。

「して、我が息子よ。何が聞きたい？」

燕泓のもとへ辿り着いた途端にその言葉が投げかけられた。礼をしてから話し始めようと思つていた倅論は、驚きのあまり固まってしまう。香楓はくすくすと笑つた。

「燕泓様、彼は……覚えてないのでから、からかつてはいけませんぬ」

「だがなあ。」

あたしにとつてみれば、やはり幾度となく転生しても息子なのだ」
軽口をたたく様子に倅論は燕泓の性格を知つたような気がした。
だが、そのおかげで平素の状態に戻る事ができた。

「燕泓様、まず……わたしは何人目ですか」

「……結論を急ぐか。まあ良い。」

お前は三人目だ。

始まりは蓮葉。次は紅緋、そしてお前」

ゆつたりとした口調で答える燕泓は落ち着いていた。倅論も落ち

着いた様子を見せていた。

「では、ここに居る香楓は何人目ですか」

「この姫は、二人目だ。」

始まりが蓮華れんぼあ、そしてここに居る香楓」

香楓は、以前の名が蓮華であると知った。だが何も思い出す事はなかった。それを寂しいとは思わなかった。何も覚えていないからだろうか。

「妾の憶測ですが、その以前の我々は同じ事を繰り返してはいませんでしたが？」

「お前も言うようになったねえ。」

以前のお前は……臆病で儂かった。

良いだろう。

その通りだよ、お前たちは同じ過ちを三度繰り返した」

神と皇子は顔を見合わせた。お互いに信じられないといった顔をしている。

「驚くのはこれからさ。」

一度目は姫が自分の意志を貫けぬ事を知り、自害した。それを嘆いた神は、人間へと転生した。

二度目は皇子が戦の傷で死に、姫はその衝撃に力を失った。力を失った神は自動的に人間へと転生する。

三度目は……香楓から聞いただろう。その通りだ」

香楓の違和感がこれで全て解決した事になる。そして倅論の聞きたい事は答えられた。

「あたしが言えるのは、お前たちがこの後何になるのかを決めるべきだって事だけ。」

それ以降、燕泓は口を閉ざしてしまった。これ以上余計な事を言うまいとしている。二人はもう一度顔を見合わせた。今度はもう驚いた顔ではなかった。皇子の決意は決まっていた。香楓には、それが手に取るように分かった。かつての自分がなりたいと思っていたように。

「さて、お前たちは どうしたい？」

エピソード

深の国の後に、廉の国ができた。

その国には深の時代から伝えられている話がある。
それはこういうものだ。

かの城の禁池には妖が宿っている。むかし、皇子がその妖にそそのかされて恋をした。妖はその想いを受け取った。

しかし皇子は一国の皇子であって、妖だけの皇子ではなかった。そのため皇子は、妖と結ばれる事は叶わない。

妖は現状だけでは物足りなくなつた。どうしたつて、皇子を手に入れる事ができない。自分だけの物にできない。それが何となく物足りなかつたのだ。

皇子の方は、この状況で完全に満足していたわけではない。しかしこの状況は仕方がない事であると思つていた。妖と完全に結ばれる事はないだろうが、お互いに想い合つている事こそが重要だと考へていたからだ。

とうとう妖は我慢ができずに皇子を攫うという強行に出た。皇子は抵抗し、閉じ込められてからは文句を言つていた。文句を言われ続けて哀しくなつた妖は皇子を戻す事にした。皇子は大変喜んだ。

宮廷の人々は皇子を攫つた事にひどく怒つていた。しかし妖の力は大きく抵抗する事は叶わない。その為矛先は皇子への不満と変わった。

皇子は城に戻つてからは今まで通りに妖と接していた。何をされようとも、愛しいと思つていた相手に変わりはない。妖はその皇子の態度に気をよくした。

ある時、とうとう宮廷の人々は皇子を追放しようとした。皇子は抵抗しようとしたが、力が及ばない。皇子は禁池にいる妖のもとへと向かった。

妖は皇子を優しく迎え入れ、自分の番つがいとした。皇子は皇子でなくなり、皇子は妖となった。

妖となって以来、度々皇子は自分を引き込んだ愛しい妖と共に禁池へ現れる。自分の存在を生み出した一族に知識を分け与える為である。この知識を得た皇族は、賢皇として名を馳せたという

一説には、皇子は妖に再び攫われたのだといわれるものもある。しかし、これらの真実がどうだったかは歴史の中に埋もれてしまった。

深の時代に以前伝わっていた神と姫の昔語りは忘れ去られ、この昔話が話された。その事実を知っているのは、当の姫と神であった皇子と妖にしか分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3599g/>

禁池

2010年10月8日15時53分発行